

# 実践を研究につなげるための日本語教師支援 —高等教育機関における研究会での取り組み—

鈴木 秀明 鈴木 美穂

## 要 旨

本稿では、日本語教師を対象とした研究支援の取り組みについて報告する。筆者らが実施している研究会の特徴は、1) 研究の完成度は問わず、気軽に発表できること、2) 発表者と参加者間のラポールがすでに形成されていること、3) 発表者と参加者双方向の活発な対話が可能なこと、4) 研究相談の機会が提供されること、5) 発表後も継続的に研究支援が行われること、である。高等教育機関での日本語教師への継続的な研究支援は、各教師の指導力の向上、実践研究に対する意欲の向上につながり、結果として日本語プログラム全体の質の向上にも寄与することが期待される。

【キーワード】 日本語教師 研究支援 研究会 意欲の向上

## Supporting Japanese Language Teachers Who Want to Translate Their Teaching Experience into Practical Research, Through Workshops at the University

SUZUKI Hideaki, SUZUKI Miho

**[Abstract]** This paper reports on a workshop for Japanese-language teachers to support their research. The workshop is characterized by the following five points: 1) The presenters are free to present or showcase their research, regardless of the degree of completion; 2) Rapport has already been formed between presenters and participants; 3) Interactive and active discussions are possible between presenters and participants; 4) Opportunities for research consultation are provided; and 5) Ongoing research support is continued after the workshops are completed.

Continuing to support the research efforts of teachers in the Japanese language programs at the university will lead to the improvement of each teacher's teaching skills and motivation for practical research. As a result, the workshop is expected to contribute to the improvement of the quality of the program.

**[Keywords]** Japanese-language teachers, supporting research, workshop, improving teachers' motivation

## 1. はじめに

高等教育機関の教員にとって研究活動は重要な職務のひとつである。教員は、教育、管理・運営、社会貢献とともに多くの時間を研究活動に費やしている。とりわけ、専任教員は、学術論文の執筆数、専門書籍の出版、外部資金の獲得、国際学会等での発表件数等の研究業績が契約更新、昇格などの教員評価の際の指標としても用いられているため、研究活動に割く時間や労力も非常に大きい。

一方、非常勤講師などの、主に授業のみを担当する教師にとって中心となるのは、学習者への教育効果の高い指導、自身の専門知識の習得や教授技術の向上にあることから、研究活動よりも自己研鑽のために時間を費やすことも多い。近年、日本語教師対象の研究会や勉強会が年間を通して数多く開催されるようになった。教授技術の向上、新たな専門知識の修得を目的として多くの研究会や研修に自主的に参加し、積極的に研究活動を行っている日本語教師も多い。さらに、非常勤講師であっても、採用時に一定以上の研究業績を求める高等教育機関もあるため、研究の重要性が増している。

教育実践を研究の形に発展させて積極的に外部に発信する教師がいる一方で、研究発表や論文執筆は敷居が高いと捉え、外部に発信することを躊躇する教師も少なくない。その理由として、自身の教室内外での教育実践が研究としてふさわしいか否かを不安に感じている、具体的な研究テーマの設定や適切な研究方法や分析手法の選択に困難に感じている、周囲への相談や助言を受ける機会が少ない、などが挙げられる。これらの問題を解消するには、同じ機関に所属している日本語教師が連携し、互いの実践の共有や研究の相談をする機会を設け、実践を研究につなげるための一歩を踏み出せるような支援が不可欠であると考えられる。

本稿では筆者らが所属している高等教育機関において継続して実施している研究会での取り組みを報告する。日本語教師が研究を進めるうえで抱えている様々な問題を解決し、研究に対する不安を軽減するための取り組みを紹介するとともに、実践を研究につなげる場としての教師支援のあり方を提案していく。

## 2. 先行研究

以下では、近年の日本語教育界で実施されている日本語教師に対する研究活動支援の取り組みや研究支援の必要性に関する先行研究を見ていく。

日本語教師に対する研究活動支援としては、学会、研究会、協会などが様々な研究支援を企画・運営・実施している。

菅生(2011)では、日本語教育振興協会(日振協)の「実践研究発表」、日本語教育方法研究会(JLEM)設立、日本語教育学会の「実践研究発表会—私の工夫・私の失敗—」、 「実践研究フォーラム」等、1990年代以降の日本語学校や大学等の教育機関に所属する

日本語教師対象の実践研究の発表の場の提供や取り組みを報告している。

奥田（2011）は、日振協の「日本語教育セミナー」を開催し『実践研究の手引き』を提供するなど、協会主導の日本語学校教員に対する実践研究の重要性や実践研究の具体的な支援内容を述べている。

2017年以降では、日本語教育学会に新設されたチャレンジ支援委員会のイベント<sup>1</sup>として「おせっかい侍」の発表応募支援（STEP1 発表のタネ探し、STEP2 発表応募支援セミナー・個別相談、STEP3 発表応募原稿チェック）が始まり、2023年時点で上記3種類のイベントは定期的（合計年4回）に開催され、会員・非会員を問わず国内外の日本語教師、大学院生、地域の日本語支援者を対象とした研究活動推進のための支援の充実化が図られている。

中川他（2020）は、日本語教員には授業実践以外にどのような管理運営業務があるのかを探るために、教務主任やコーディネーター経験のある日本語教員13名を対象にアンケート調査を実施した。調査では管理運営業務を「教育・学事に関する業務」「学生に関する業務」「教員に関する業務」「施設・設備・予算に関する業務」「対外業務」「研究支援」の6つのカテゴリーに分類し、さらに下位項目の29の業務に関して業務経験の有無を質問した。その結果、紀要や勉強会開催などの「研究支援」に関する業務は、13名中10名が実施していると回答した。

館岡（2021）では近年の日本語教師研修の動向を述べ、各教師が抱える課題を解決する上で「対話型教師研修」の有効性を述べている。さらに、「対話型教師研修」では参加者間で対話を重ねて協働で問題を解決し、内省し、その内省を対話により共有していくことで、意味を生成していくとしている。これは日本語教師が自身の実践を研究につなげる際にも共通するものである。

上述した先行研究より、学会、研究会、協会など外部の各種機関が日本語教師に対して研究支援を実践していることがわかったが、これらの支援が享受できるのは会員やイベント参加者に限られ、多くの日本語教師にまで行き届いているとは言えない。

各高等教育機関においても、日本語教師への研究支援の重要性を認識し、ファカルティディベロップメントの一環として、また日々の実践を対外的に発信する場として、学内研究会での発表や学内紀要への投稿を推奨している。しかし、その前段階としての個別の教員への研究支援の取り組みに関する実践報告は管見の限り見られない。

筆者らの機関の講師室では、授業の前後に教員間での教育実践の共有が積極的に行われている。同僚の実践には新規性があり、実践研究になる可能性が高いことを感じ、筆者らは発信を視野に入れた実践研究につなげていくことを提案した。しかし、その際に、研究意欲はあるものの、自身の教室内外での実践が果たして実践研究としての価値があるか不安に感じている声や、実践自体には良い感触があるが、外部発信に向けた手立て

がわからないという声を耳にした。さらに、具体的な研究テーマの設定、適切な研究方法の選択、オリジナリティの有無等に関して、身近な場所で相談や助言を受ける機会が手に入れられず、結果として発表応募や論文投稿に至らないという相談を筆者らが受けた事例もある。

こうした問題点を解消するには、同じ機関に所属している日本語教師同士が日々のやりとりの中でラポールを形成し、授業の相談をするように実践研究に関しても同僚に気軽に相談し、助言を受けられる場が必要ではないかと考えた。日頃、同僚として一緒に仕事をしている教師であれば、研究会の発表者と参加者になった場合でも、和やかな雰囲気の中で対等な立場で対話を重ねることが可能だろう。

本稿では、実践を研究につなげるための日本語教師支援として、筆者らが所属している高等教育機関における研究会でのさまざまな取り組みを報告する。

### 3. 本研究会

以下では筆者らが運営している研究会について述べる。

#### 3.1 概要

2013年に、当時の日本語プログラム責任者の発案により研究会を主催するようになった。研究会は毎年2回(3月と9月)実施しているが、研究会同日には日本語プログラムの講師会議も開催されており、参加者は講師会議と研究会の両方に出席することが一般的である。

研究会には同機関の日本語プログラムで授業を担当している専任教員および非常勤講師、そして過去に同プログラムで日本語科目の担当経験がある日本語教師が参加している。毎回の研究会の参加者は専任教員3、4名、非常勤講師および科目担当教員6-8名、合計で10数名である。研究会は日本語プログラムの講師会議と同日に連続して実施しており、発表者および参加者にとっても利便性の高い時間に設定されている。

実施形態は研究会発足時は学内の教室で対面で実施していたが、コロナ禍の2021年以降は、研究会の形態を遠隔(Zoom)に変更して実施しており、コロナが収束した2023年時点でも継続して遠隔で実施している。

研究会は研究発表会(1時間)と懇親会(1時間)の2部で構成されており、いずれの部分も参加は任意である。各回の研究発表会では1組または2組の発表者が進行中の実践や終了した実践を発表している。発表者の多くは自身の実践を開示し、参加者からのコメントをもらうことで、実践の質を向上させたいと考えていることから、対外的に発信することを目的としない事例も少なくない。

研究発表会では、まず発表者が実践を報告し、実践上で抱える課題も提示する。その後、

参加者間で質疑応答を行い、実践内容、教材活用、評価方法などに関して活発に意見交換が行われる。質疑応答の際には、発表者から参加者に対して質問や相談をする場合もある。1組あたりの時間は発表および質疑応答を含めて30分程度である。

懇親会はブレイクアウトルームを用いて行われる。ブレイクアウトルームでは「①参加者との情報交換・懇談」「②研究相談会」「③発表者との意見交換」の3つのルームを提供している。「①参加者との情報交換・懇談」ルームは、教師の近況や現在実践中のことを話す雑談の場、「②研究相談会」ルームは、研究会のコーディネーターに気軽に個別相談する場、「③発表者との意見交換」ルームは、研究発表について引き続き対話する場とした。表2に2022年9月の研究会のタイムテーブルを示す。

遠隔による研究発表会および懇親会の2部で構成される研究会は、参加しやすく、参加者間の交流も気軽に行えるなどの理由から参加者にも非常に好評であり、2023年度以降も同様の形式で継続して実施している。

表1 2022年9月のタイムテーブル (Zoom開催)

時間	概要	内容
10:55-11:00	受付	Zoom入室
11:00-11:05	研究発表会	開会挨拶
11:05-11:30		発表1、質疑応答
11:30-11:55		発表2、質疑応答
11:55-12:00		各種連絡、閉会挨拶
12:10-13:00	懇親会	①メインルーム「参加者との情報交換・懇談」 ②ブレイクアウトルーム1「研究相談会」 ③ブレイクアウトルーム2「発表者との意見交換」

### 3.2 研究会の変遷

本研究会は発足以来、既に約10年が経過しているが、発足当初はファカルティディベロップメントとして、発表者による講義形式で実施されていた。同じ日本語教育機関に所属する教師間で実践内容を共有することで、自身が担当していないレベルや未経験の科目に関する知見を深めることが可能であり、授業内容、教授方法、教材使用などを改善し、授業の質を向上させるための場として、研究会参加者からは高い満足度および有用度が得られていた。

その後、研究会発足数年後に、発表経験がある教師や外部への発表準備をしている教師から、発表準備中の実践を紹介し、他の教師からの意見やコメントを聞く場として研究会を活用してはどうかという提案があった。そこで、対外的に発信する前に同僚から忌憚のない意見や建設的な批評を聞くことができる場、すなわち実践を研究につなげる場として、本研究会は徐々に発展していった。

### 3.3 研究会の特徴

本研究会では、日本語教師を支援することを目的としているため、先行研究で述べた外部の機関が主催する研究会とは様々な点で異なっており、研究会の特徴となっている。以下に5点の特徴を挙げる。

#### 3.3.1 研究内容の完成度

現在、本研究会では進行中や終了した実践を発表してもらうことも多いため、研究内容の完成度や質は厳密に問わないことにしている。まずは、発表者に自身の実践を口頭や文章で言語化し、発表者の思考を整理し、実践を研究に推進するための機会にってもらうことに重点を置いている。

#### 3.3.2 発表者と参加者間のラポール

研究会の参加者は同じ機関の日本語プログラムの教員としての面識があり、授業でティームティーチングを経験している教師も多い。そのため、既に教師間でのラポールが形成されており、発表者は研究会でもかまえることなく実践を開示することが可能である。また、参加者も発表者に対して敬意を払い、質疑応答の際には忌憚のない意見交換や建設的な批評が行われている。

#### 3.3.3 双方向の活発な対話

研究会では発表後に質疑応答が行われるが、通常行われる参加者からの質疑応答に加え、発表者から参加者への質問や相談なども頻繁に行われている。さらに、参加者からも発表者と類似の自身の実践経験の開示や発表者への具体的な提案などもあり、発表時間を最大限に活用して双方向の活発な対話が展開されている。発表時間内で話しきれなかった内容は、研究会後の懇親会の「発表者との意見交換」で延長戦が可能である。

これらの双方向の活発な対話は外部の学会や研究会とは異なり、インフォーマルながらも、自由なアイデアが数多く提示されている。

#### 3.3.4 研究相談の機会の提供

懇親会では研究相談の機会を提供している。発表者の実践の開示を目の当たりにし、自身も実践を発表してみたいと思い始めた参加者がこの「研究相談会」で気軽に実践を相談している。過去の研究相談の内容では、「実践がある程度軌道に乗ったので、同僚に実践を開示して共有したい」、「自身の実践をどのような切り口で発表に持って行けば良いか」、「新しい科目を担当し始めて試行錯誤を繰り返しているので、他の参加者からのコメントをもらい授業改善に反映したい」、などがあった。

### 3.3.5 発表後の継続的な研究支援

発表者は研究会後も講師室で授業の引継ぎや休憩時間などにその後の実践の進捗状況を伝えたり、相談をしたりするなど、研究について同僚と話をすることがある。さらに、発表者は研究会のコーディネーターにも個別に相談し、随時コメントが受けられる環境にある。コーディネーターも発表者に対してその後の進捗状況を聞いたり、論文投稿や外部研究会での発表応募について助言したりしている。

以上5点は本研究会の特徴であり、学会等が主催する外部の研究会と性質が異なっている点である。(表2に本研究会と外部の一般的な研究会を項目別に比較する。)

本研究会と外部の一般的な研究会を比較すると、本研究会は発表者にとっても準備段階の負担も少なく、発表時の精神的な緊張も軽減されると思われる。また、発表後に自身の実践をふり返り、改善していく際にも個別に支援が受けられる環境にあると言える。一方、研究会の参加者にとっても、面識のある発表者とやりとりができるのは、自身の実践を研究につなげるための意欲向上のうえで一定の効果があると言えるだろう。

表2 本研究会と外部の研究会との特徴の比較

項目	本研究会	外部の一般的な研究会
(1) 研究内容の完成度	不問 (未完成、実践途中)	一定以上、高い (採択済み、審査有)
(2) 参加者間のラポール形成	あり(面識者) (実践内容の共通認識あり)	不十分 (会員、面識なし)
(3) 質疑応答、意見交換	参加者⇄発表者 (全員でやりとり)	参加者→発表者 (発言者と発表者)
(4) 研究相談会	個別対応あり	一部あり
(5) 研究会後の継続支援	あり (コーディネーター、同僚と)	不明

## 3.4 研究会コーディネーター

研究会発足以来、同機関の専任教員であり、日本語プログラムのコーディネーターでもある筆者ら2名が、継続して研究会コーディネーターとして本研究会を運営している。以下では、コーディネーターの役割、注意点を順に述べる。

### 3.4.1 コーディネーターの役割

研究会のコーディネーターは、プログラム作成、司会・進行等の研究会の運営に加え、発表者の発表への助言、さらには参加者対応などソフト面での様々な役割も担っている。研究会でのコーディネーターの役割を以下に記す。

研究会実施前には、まず、発表者募集を行う。その後、発表者との事前打ち合わせや発表者からの研究相談を行う。発表者が決定した後は参加者への通知、出欠確認、教

室手配、Zoom 準備、プログラム作成なども併せて行う。

研究会当日は、司会・進行を担い、時間管理をしつつも発表者と参加者間のコミュニケーションが円滑に進むように対応する。

### 3.4.2 コーディネーターとしての配慮

本研究会では、コーディネーター、発表者、参加者が同一の日本語プログラムを担当している（担当していた）という利点を生かしつつ、同僚の教師にとって研究会での発表が過度の負担や精神的不安を与えないように配慮している。

まず、発表者の募集段階での配慮である。毎回の研究会を開催する数ヶ月前に口頭やメールで発表者を募り、現在進行中の実践や既に終了した実践の発表を促している。発表募集から発表当日まで余裕を持った時間を設定することで、準備に余裕が生まれる。また、発表者を募集する際には、必ずしも実践研究としての形が整っていない状態や、データ収集や分析が終わっていない段階でも差し支えない旨を丁寧に伝えている。発表に興味を持っていても、手を挙げることを躊躇している教師には、発表を勧める前に時間を取ってコーディネーターが個別に話を聞くことを心掛けている。さらに、発表によって得られるメリットとして、1) 自身の実践が言語化される、2) 他者に伝えることで思考が整理される、3) 他の参加者からの質問に回答し、コメントを自身の実践の参考にすることで実践が前進し質も向上する、などを直接伝えるようにしている。

そして、研究会直前に発表者から申し出があった際には、発表のリハーサルの機会を設けている。発表者の不安やストレスを軽減し、自信を持って発表に臨めるように努めている。

コーディネーターとして筆者らが最も意識し、配慮しているのは、実践研究に進むのを躊躇している教師の背中を優しく押し、寄り添い続けることである。具体的には、以下の2点を挙げる。

1点目は、日頃から多くの教師との積極的にコミュニケーションを取り、各教師がどのような実践に取り組んでいるかを自然に聞き取り、把握することである。また、講師室での授業報告や休憩時の雑談の中に出てきた学習者の様子や実践上の悩みにも耳を傾け、当該教師が安心して実践を開示し、コーディネーターを相談相手として意識してもらえるようにしている。

2点目は、実践を言語化し、研究会で発表することにより得られるメリットを伝え、当該教師のモチベーションを上げていくことである。さらに、研究会での発表に至るまで定期的に相談を受け、不安が軽減されるように研究や発表の助言などの支援を行っている。

## 4. 発表経験者の様子

以下では、実際にこれまでに研究会で発表を行った教師の様子について、コーディネーターの観察を通してわかったことを、発表準備、発表当日、発表後の順に述べる。

### 4.1 発表準備

各回の発表者の特徴として、研究会の発表の際に取り上げる実践（科目・レベル）は決まっていますが、日々の実践をどのようにまとめるのか、何を切り口にするのかという具体的な発表の方向性に迷いを感じ、コーディネーターに事前に相談に訪れる発表者も少なくなかった。また、一定の発表の方向性はあるものの、授業で使用したティーチング・ポートフォリオ、学習者の作品や提出物など、発表者の豊富な資料の分析方法がわからず、発表にどのように盛り込めば良いのかという相談を受ける機会もあった。研究会での発表が近づくにつれて、準備した内容で果たして十分か、研究会当日は無事に発表ができるのか、実践を参加者にわかりやすく伝えられるか等、様々な不安を抱えている様子もうかがえた。

### 4.2 発表当日

発表者は準備した資料に基づき、実践の概要、実践の効果、改善点、自身が抱えている課題や不安を言語化していた。一方、実践の方向性やオリジナリティ、研究目的に関しては、自身の言葉での言語化に苦労している様子が見られた。この点をより深く観察すると、発表者の頭の中にある実践にオリジナリティを加え、適切に参加者に伝えるということは、経験豊富な日本語教師にとっても、容易ではないことがうかがえた。

しかし、言語化に苦労しつつも、参加者からの質問に一つずつ回答していく過程で、発表者は自身の実践を深く内省し、実践の方向性や興味や関心を精査し、自身の言葉で具体的に説明を試みている様子も見られた。

### 4.3 発表後

本研究会での発表者は、研究発表会で参加者から得たコメント、助言、提案を参考にし、実践を継続している。研究発表会で一度発表し、自身の実践を言語化し、参加者からの有益なフィードバックを得たことにより、思考が整理され、曖昧だった研究の方向性が明確になってきたという声も耳にする。

研究発表会後は、同僚と実践に関する情報共有ができていたため、実践上の小さな工夫や改善点などを気軽に伝えることが可能になった。そして、休憩時間や授業の引継ぎの際には、発表者の実践に興味を持っている同僚から発表者に対しての声かけや情報交換が行われている姿も頻繁に見られた。

さらに、本研究会を外部の研究会発表のリハーサル場として活用する一歩進んだ教師も徐々に出てきた。リハーサル後に、スライドやポスターを修正したり、参加者からのコメントを発表内容に加えるなどの改善を行っていた。それ以外にも、研究発表や論文投稿に明るい同僚に実践内容に応じた外部研究会について尋ねたり、大学の紀要や研究会のジャーナル投稿の応募方法を個別にコーディネーターに相談する姿も見られた。

ここ数年で所属学会や研究会への発表応募や論文投稿を試みる発表者も徐々に現れ始めている。研究発表会での発表を契機に、発表者が自身の実践に自信を持ち、さらに外部の日本語教育関係者にも実践を知ってもらい、より多くの有益なコメントを得るのを望むようになったからではないかと考えられる。

#### 4.4 発表者の声

以下では、コーディネーターが発表経験者より聞き取った発表準備、発表当日、発表後の時点における気づきや感想を記す。

発表準備では、「資料作成やコーディネーターとの相談、打ち合わせを通して、経験と勘にもとづいて実施していた日々の教育実践を客観的に捉え直すようになっていった」とのことである。また、発表資料を作成することにより、「自身の実践を言語化することを試み、実践の中で何を焦点化するかが明確になっていった」とも述べている。

発表当日は、「準備した内容を参加者に伝え、参加者からのコメントや質問を受けるという双方向的なやりとりを通して、多くの刺激を受けた」とのことである。また、「参加者が予想していなかった視点からの質問に回答することで、自身の実践の新たな可能性に気づくことができた」と回答していた。

発表後は、発表前と比較して、自身の実践および研究への取り組みに対する自信が芽生え、より主体性を持ち次の実践に取り組めるようになっていったと述べていた。

#### 4.5 波及効果

本研究会で実施している日本語教師への研究支援は、発表者のみならず、参加者、コーディネーターにも様々な影響を及ぼしている。以下では、どのような影響が見られたかを順に述べる。

発表者は研究支援を受けて発表を行い、発表後に自身の実践をふり振り返り、自身の実践において何ができ、何が不足しているかを可視化することができるようになった。そして、日々の実践に還元する際の指針や方向性が明確になっていった。

参加者からは、「毎回の懇親会での情報共有や意見交換の際に、発表者の実践を聞き新たな気づきを得ている」、「自身の教授内容や記述に関する引き出しが増えて有益である」、「同一学習者に指導をしているため、指導上の工夫や教育効果などの発表内容が説得力が

あり共感しやすい」などのコメントがあった。この点から見ると、発表者の姿を見て、様々な観点で少なからぬ刺激を受けていることがうかがえた。そして、自身の実践を同僚に共有する意欲が生じ、実践研究に一步を踏み出す勇気を持ち始めている参加者もいるようである。

コーディネーターは講師室での対話の延長線上で実施している教師支援が発表者や参加者の意欲の向上につながっていることを認識することで、各授業の学習目標や指導法などを教員間で情報共有することが可能になり、結果として円滑な日本語プログラムの運営につながることが期待される。

このように、本研究会は発表者が自身の実践を公開することで、参加者に刺激を与え、研究に対する意識を活性化させる効果があり、さらに参加者同士の情報共有や実践の協働などにも発展している。

## 5. まとめと今後の課題

筆者らが実施している研究会の5つの特徴を再度述べると、1) 研究の完成度は問わず、気軽に発表できること、2) 発表者と参加者間のラポールがすでに形成されていること、3) 発表者と参加者双方向の活発な対話が可能なこと、4) 研究相談の機会が提供されること、5) 発表後も継続的に研究支援が行われること、である。

発表者は研究発表会で自身の実践を発表することにより、1) 研究会で自身の実践を言語化し、同僚からの有益なコメントが得られる、2) 研究会発表後も自身の実践を継続し、定期的に言語化し、同僚から追加の助言が得られる、3) 実践の方向性が徐々に明確になり、オリジナリティのある実践を研究として確立し、学会発表や論文投稿を試みるなどの各種メリットがあることがわかった。

本実践のような高等教育機関における研究会は、外部機関で提供される一般的な研究会や教師支援とは異なり、発表者と参加者が対等な立場で対話を重ね、発表者が内省を繰り返し、次への一步を踏み出す場として安心して自己開示ができる場になっている。そのため、実践を研究につなげる場としても一定の役割を担っていると言えるだろう。

## 謝辞

本稿は日本語教育学会 2022 年度秋季大会でポスター発表した内容をもとに、加筆修正したものである。発表の際にコメントをくださった参加者の皆様に感謝申し上げます。

## 注

1. 日本語教育学会のチャレンジ支援委員会のイベント内容の詳細に関しては、以下の URL [https://www.nkg.or.jp/assets/chukikeikaku\\_2021-2024.pdf](https://www.nkg.or.jp/assets/chukikeikaku_2021-2024.pdf) (2023 年 10

月1日)を参照のこと

## 参考文献

- 奥田純子 (2011) 「日本語学校における実践研究 - 『実践研究の手引き』刊行をめぐって -」  
web版『日本語教育実践研究フォーラム報告』第二部パネルディスカッション：1-6
- 菅生早千江 (2011) 「「実践研究」に関する関係機関の取り組み」web版『日本語教育実践研究フォーラム報告』第一部実践研究フォーラム委員からの調査報告：1-13
- 館岡洋子 (2021) 「講師提供型教師研修から」対話型教師研修へ - 自律的な学び合いコミュニティ創成へ向けて -」『アジアに広がる日本語教育ピア・ラーニング』協働実践研究のための持続的発展的拠点の構築第3章：63-70
- 中川健司・平山充子・浦由美 (2020) 「日本語教員が『教える』以外に抱える仕事 - 日本語教員の管理運営業務に関する調査 -」『ときわの杜論叢』7号：57-69